

「漆で結ぶ」プロジェクト

—あいづまちなかアート 2025 における制作展示を通して—

吾子 可苗

「漆で結ぶ」プロジェクト

-あいづまちなかアートプロジェクト 2025 における制作展示を通して-

吾子 可苗 *

【要旨】会津若松市で継続的に実施されている「あいづまちなかアートプロジェクト」は、2025年度で13年目を迎える。今年度より、市内に「アートセンター」が新たに開所され、アートを通して地域を繋ぎ、文化発信の拠点としての機能を担うこととなった。

今回、著者は同プロジェクトの「Pickup Artist」に選出され、あいづまちなかアートプロジェクト実行委員会の協力のもと、地域の方々と共に制作活動を行った。

本稿では、「あいづまちなかアートプロジェクト 2025」において実施した「漆で結ぶ」プロジェクトにおける素材の選定、ワークショップを通じた共同制作、ならびに展示について報告する。

* 会津大学短期大学部産業情報学科准教授

1 はじめに

漆芸は、日本を代表する工芸の一つであり、多様な技法と素材が重なり一つの作品となる。その制作工程の一つに、漆を塗布する前段階として行われる「濾し」の作業がある(図1)。これは、漆液に含まれる細かなゴミや埃などの不純物を除去し、塗膜の表面を美しく仕上げるために不可欠な工程であり、最終的な作品の品質を左右する重要な作業である。

この「濾し」の工程に用いられるのが「濾紙(こしがみ)」である。濾紙は和紙製で、高い強度と柔軟性を持ち合わせるため、粘度の高い漆を包み両端から捻って圧搾しても破損することなく使用することができる。

一方で、濾紙は漆を濾すという役割を終えた時点で、その多くが付着した漆とともに廃棄されている。しかし、漆は10年以上かけて生育した樹木からわずか180mlほどしか採取できない、極めて貴重な素材である。濾紙を十分に絞り切った後であっても、そこには貴重な漆が付着しており、素材としての価値を保持していると考えられる。

本プロジェクトでは、このように通常は制作過程の中で廃棄される濾紙に着目し、それを表現の主軸として、漆という素材を通して様々な地域や人々を繋ぐ作品制作を目指した。



図1 漆を濾す様子

2 制作について

はじめに、全国の漆工芸従事者に協力を依頼し、使用済みの濾紙を収集した。その結果、会津漆器関係者をはじめ、漆器の産地として知られる輪島塗や漆液の産地である茨城県大子町の漆関係者、各地で活躍する漆職人や漆芸作家、漆工芸を指導している美術大学等より合計430枚の濾紙を集めることができた。これらの濾紙は、使用された漆の種類や顔料の違い、濾す時にかかる圧の強弱などによって多様な色調や質感が現れており、単なる副産物を超えた素材としての魅力を感じさせる素材であった(図2)。

次に、これらの濾紙を用いた作品制作として、前述のアートセンターにおいて市民参加型のワークショップを実施した。濾紙を幅約1.5~2cmに手で裂き、それらを一つひとつ結び合わせることで、三角形を基本とする網目状の構造体を制作した(図3)。ワークショップには子どもから高齢者まで幅広い年齢層の方々が参加し、普段は目にする事のない濾紙を通して、漆を直接的に感じるとともに、素材と向き合いながら漆芸の制作過程への理解を深める機会となった(図4)。



図2 全国から集められた濾紙



図3 三角形に編まれた濾紙



図4 ワークショップの様子

3 展示について

完成した作品は、会津若松市文化センターのエントランスホールにおいて、吊り下げる形式で展示した。テグスを用いて複数点で支持し、編み上げた濾紙に負荷がかかりすぎないようにバランスに配慮しながら全体の形状を構成した。両端部には漆本来の色調である茶色や黒漆が付着した濾紙を配置し、中央部に向かうにつれて顔料を混合した色漆の濾紙を配置することで、漆の持つ自然な色彩のグラデーションが生まれた。この構成により、漆の表情の変化を素材や色彩から感じ取ることができる作品となった。全体の長さは10mを超え、テグスによって支えられた作品は、まるで宙に浮いているかのような印象をあたえる。来場者がその下から鑑賞することで、漆に包まれるような体験を伴う展示となった(図5-7)。



図 5-6 編み上がった濾紙を展示場所に配置した様子



図 7 完成

4 おわりに

本プロジェクトは、漆という素材を通じて、作家、職人、市民が関わり合いながら、一つの作品を制作する取り組みであった。完成した作品だけでなく、濾紙を集め、裂き、結び、編むという過程そのものが、「漆で結ぶ」プロジェクトの核心となり、人と人、素材や場所など様々なものを繋ぐ役割を果たした。

漆は、椀や箸など日常生活に根付いた工芸品として広く知られているが、その制作には多くの材料や道具、工程、そしてそこに関わる人々の手仕事が存在している。本プロジェクトを通じ、漆を濾し終え廃棄する濾紙という素材に着目することにより、漆芸の奥深さをあらためて示すとともに、工芸とアート、そして地域を結びつける作品を制作・展示することができた。

謝辞

本制作にご協力をいただいた方々に深く感謝申し上げます。

